



Title	乳癌の集団検診
Author(s)	上田, 進久
Citation	癌と人. 1985, 12, p. 21-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24142
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

乳 癌 の 集 団 検 診

上 田 進 久*

乳癌の集団検診は、昭和43年に始まり本年で17年目を迎えます。現在では、大阪府下13都市（吹田、豊中、箕面、池田、茨木、摂津、四條畷、大東、羽曳野、藤井寺、松原の各市と、河南町、美原町）において実施されています。検診方法は、図1に示します様な順序を経て行われています。我々の方法の特徴は、一次検診から治療までを一貫して微研病院が担当して行っていることであり、データの正確さは高く評価されています。現在では1年間の受診者数は約15,000人であり、16年間の延受診者は約75,000人に達します。この中には繰返し受診した人数も含まれますので、実際には約45,000人が受診したことになります。この検診において106人の乳癌が発見されました。今回、各都市について年齢別に人口当りの受診者数、すなわち受診率について調べる機会がありましたので、皆様と共

に考えてみたいと思います。年齢別の人口構成は、昭和55年度の国勢調査の資料を参考にしました。

人口当り僅か3.0%の受診率

調査の結果、検診の対象としている30才以上の人口当りの受診率は、平均して僅か3.0%でした。せめて10%程度の受診率を目標にしている我々には、残念な結果でした。我国で関心が高く、歴史も長い胃の集団検診の受診率は10~30%と高く、これと比較しますと我々の挙げる受診率10%が決して無理な目標ではなく、又近年乳癌が増加傾向にあることを考えますと努力すべき問題であると思います。

乳癌の好発年齢

乳癌の好発年齢は、我国では40代後半をピークとする一峰性であるのに対し、米国では40代後半と60代後半にピークをもつ二峰性であると言われています。微研外科における乳癌の年齢構成は、図2の如くで、40代が最も多く、50代、30代、60代の順となります。乳癌が決して若い人だけの病気ではなく、50代、60代にも少なからず発生していることを、もう一度肝に銘じていただきたいと思います。

一方、乳検受診者の年齢別構成をみますと30代が圧倒的に多く約半数近くを占め、40代は、

I. 問診票

II. 視・触診

異常所見
⊕ ⊖
↓ ↓

III. 精密検査 1年後再検

マンモグラフィー

エコーグラフィー
CT マンモグラフィー

総合判定

悪性 悪性疑 良性
↓ ↓ ↓
生 検
↓ ↓ ↓

IV. 処置

根治手術 経過観察

図1 微研方式による乳癌検診

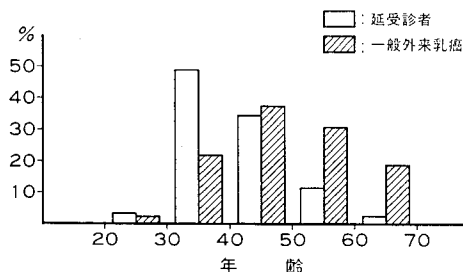


図2 延受診者と一般外来乳癌の年齢別比較

* 大阪大学助手，微生物病研究所附属病院外科

35%, 50代は僅か11%, 60代にいたっては2%程度と、高令になるに従って受診率の低下が顕著となります。受診者の理想的な年齢構成は、乳癌の好発年齢と同じ傾向を示すことでありますが、現状は大きくかけはなれています。たとえば受診率は低くとも、高令受診者を増す努力をすることによって効率よい集検になるものと思われます。

次に各都市別にみた年齢別受診率(図3)について考えますと、大きく二つのタイプに別け

られます。一つは、40代をピークにする型と、他は30代をピークとし高令になるにつれて受診率の低下がみられる型です。前者は、長年集検を行ってきた都市にみられ、後者は比較的集検年数の短い都市に多くみられました。この傾向は、集検年数の長いところでは、特に癌の予防や早期発見について関心の高い人達が毎年繰返し受診することによって次第にピークが高年齢層へと移行していく結果だと考えられます。今後同様の傾向が持続し、徐々に理想的な受診

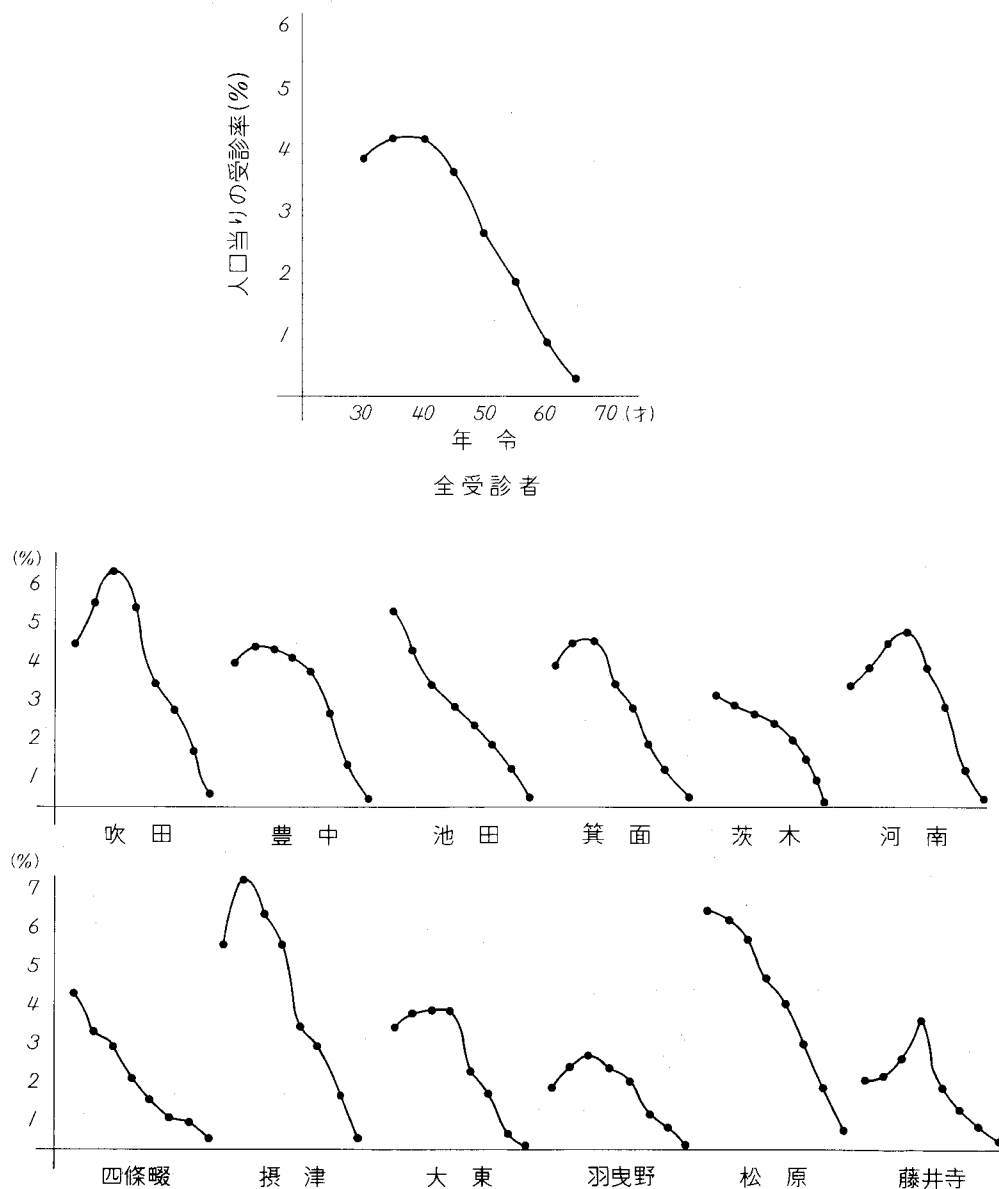


図3 年齢別にみた人口当りの受診率

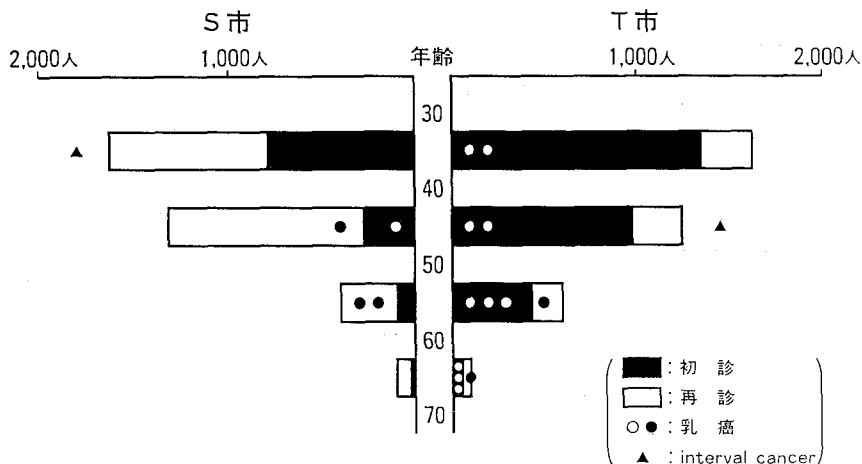


図4 集検年数の異なる2都市間における受診者の内訳

者の年齢構成に近づくものと期待されます。

繰返し受診することで癌は予防できるか

集検年数の異なる二都市を比較して(図4)興味ある結果が得られました。S市とT市は、隣接した市で、人口、受診者数、年齢構成と類似していますが、S市は集検16年、T市は3年目です。S市の受診者の内訳は再診者が過半数を占めるのに対して、T市では大部分が初診者です。1年間にS市では4人が、T市では12人の乳癌が発見されました。T市で発見された乳癌12人中10人は初診者の中から高率に検出されました。ここで皆様に考えていただきたい事は、S市において再診者3人に乳癌が発見されたことです。毎年再受診者の中から、低率ではありますが乳癌が発見されています。我々のデータでは、受診者1,000人に対して初診者では1.6人、再診者では0.6人の検出率であります。

検診を受けることは、癌の早期発見を目的とするものであり、癌の予防とは異なることを再確認していただきたいと思います。

今後の課題

集団検診は、不特定多数の人達の健康維持と病気の早期発見を目的とするものでありますが実際には、担当する医療機関が少なく対象とする者全員を受診させることは不可能であります。従って現状の体制下において出来るだけ効率よ

い検診を行うように努力せねばなりません。これにはまず第一に、40代後半を中心に50代、60代の受診を呼びかけることが大切だと思います。

乳癌は増加傾向にあり、我国の統計によれば、同世代のうち80人に1人が一生の間に乳癌に罹ると言われています。集団検診は、ますます重要視され、その体制作りは行政レベルの問題として捉えて初めて解決の糸口がつかめるように思われます。

今回、各都市における人口当りの受診率を年齢別に検討しました。この資料が今後の集検において、受診者の動員方法を考える一助になれば幸いです。

